

Title	小林一茶の俳諧サークルの教育史的意味について
Sub Title	The historical meaning of education in the "haikai circle" of Issa Kobayashi
Author	渡辺, 弘(Watanabe, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1988
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.28 (1988.) ,p.123- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000028-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小林一茶の俳諧サークルの教育史的意味について
The historical meaning of education in the “Haikai
circle” of Issa Kobayashi

渡 辺 弘
Hiroshi Watanabe

In this paper I will consider the following through the “Haikai circle” of Issa Kobayashi. Tokugawa period is said a society of the class system. And each social class (or social stratum) is said to have had its own culture and learning opportunity.

But in the late of Tokugawa period the fusion in the culture and the learning opportunity is seen. What was the concrete face of it?

はじめに

教育の実際のあり方は、絶えずその時代の人々の考え方やあるいは社会的要因によって変化する。そして、こうした変化の中には、国家的政策に基づいた急激な変化がある一方、他方では民衆レベルでの、いわば緩やかな底流のような教育の構造的変化というものがある。両者は、個々別々のものではなく相補的傾向を帯びたものであることは言うまでもない。ただ一般的に、前者の急激な潮流に過度に注目することによって、後者の緩やかな流れを見落とすといったことが時として生じるのである。

こうした点に注目しながら、わが国の近世から近代への教育の構造的変化をみた場合、どのようなことが考えられるだろうか。わが国の近世から近代への教育の構造的変化は、一般的に近世（特に江戸時代）の厳しい身分制社会における閉鎖的な学習機会から、近代の四民平等社会の開放的な学習機会へと変化したと考えられている。確かに国家レベルでの制度的・法制的改革などに着目した場合、表面的にはそうした非連続的要素を帯びた急激な変化が認められるかも知れない。しかし、当時の民衆生活に根ざした緩やかな教育的変化に視点を移した場合、必ずしもそうとばかりはいえない。例えば江戸時

代後期における人々の学習機会の状況について、私塾やさまざまな庶民の学習サークルの形成などにみられる、いわば「士庶同学」による教養における階層融合傾向にみられる具体的な教育的事実からは、一概に江戸期には身分制社会における閉鎖的な学習機会しかなかったとは断定できない点が現れてくるのである。ここには、いわば本質的に、わが国の教養における階層融合傾向による近世から近代への連続的要素を帯びた緩やかな教育の構造的変化がみられるのである。

この問題の一端を吟味するために、本稿では文化文政期における小林一茶の俳諧サークルをとりあげてみたい。このテーマをとりあげた理由として、まず第一は、私自身の関心からいえば、一茶自身に教育的魅力を感じるからであり、第二に文化文政という時代は、特に農民層の分化を前提とした上層農民の上層町人などの階層融合傾向がみられる時代だからであり、第三には当時大衆的な楽しみとなっていた俳諧をめぐって、既成の学習機関の枠から外れたところで、人々が自主的にサークルとしての「座」（集会の席）を結成し活発に学んでおり、ここにさまざまな教育上重要な問題が隠されているからである。本稿の構成として、大きくこれを二部に分け、1では一茶社中が活動した時代（文化文政期）の特色を、当時の階層融合傾向の活発化と俳諧の一般的動向を中心

に吟味し、2では一茶社中の俳諧活動の教育史的意味について、1の吟味に基づきながら考えてみたい。

1. 一茶社中とその時代一階層融合傾向の活発化と俳諧の動向を中心として一

(1) 化政期(1804-27)における階層融合傾向の一般史的事実について

まず、化政期において、特に農民層の分化を前提とした上層農民の社会的地位および経済力の武士層や上層町人への接近に伴う階層融合傾向について、若干の歴史的背景について考えてみたい。

徳川体制の出発の当初にまかれた貨幣経済の種子が、自然経済を基盤とする封建体制に寄生する形で育っていった。その結果、貨幣経済の推進者としての町人層は、武士層への金銭の融通および商品の仲介による利益などによって、体制維持の必要不可欠な存在となり、元禄の頃になると、社会に確固たる地位を占めるようになった。その後この層の階層分化が進行する農民層も、上層農民としての豪農(商)と、下層農民としての小作・貧農の階層分化が生じることになる¹⁾。この現象は、化政期を中心とした江戸後期に一層進み、上層農民は商業活動・手工業生活によって、なんらかの特許を得て経営をより一層拡大していった。小作・貧農は逆に土地を手放して、日雇・奉公人などの労働力の販売によって生計を維持し、そのため食料品のほとんどを「買い喰い」しなければならないようになった。因に、江戸後期の信濃では、農民層の分化が激化し、化政期になると豪農と小作貧農との対立が鋭化し、村方騒動・小作騒動も空前の高まりを示した²⁾。こうした豪農(商)は、民政の実質的な指導者としての地位を維持していくために、単に経済力や社会的地位だけでなく、指導者としての人格や教養が要求されて、さまざまな教養を身につけていった。例えば、豪農で漢詩の世界に入った人がいたり、国学・和歌および俳諧に入って、家業を捨て文学人となった人は数えきれないと言われている。なお上層町人も、私宅を開放して毎月書画会・盆栽会・朝顔会・菊の会など催すこともしばしばであった³⁾。

ところで、階層融合傾向は、当初階級的要求に応じて成立したはずの学習機関にも見られ、例えば「寺子屋」「郷学」(庶民用)への参加者の中層から貧農層への拡大傾向、あるいは藩校(学)に見られるような武士用の教育機関への一部開放、またはいわゆる「私塾」の盛況といったことを考えれば、その事情は自ずから明らかであろう。

最後に、教養における階層融合化を活発化させた間接的要因として、江戸後期における都市と農村との活発な交流に伴う、情報送達の容易化・出版の拡大および貸本屋の発達、あるいは遊行俳諧師・講師師・儒学者などによる知識の伝達なども考えておかなければならない⁴⁾。

(2) 化政期における俳諧の一般的動向と一茶社中形成の足跡について

(a) 化政期における俳諧の一般的動向について

当時の俳諧の第一の特色は、俳諧の「民衆化」ということである。俳諧はしだいに広く大衆のもてあそびものとなり、彼らの趣味および教養の一つとみなされた。俳諧の指導者については、「今世は俳諧宗匠二三百人もこれ有るよし、皆風雅の道は露知らず」(『塵塚談』文化11年)とあるように、遊客の機嫌をとり酒興を助けることを業とするような、いわゆる太鼓持ちとしての暫間的俳諧師たちが横行する世の中ともなった。

第二の特色は、月並俳諧の流行である。「月並俳諧」とは、不特定の一般投句者を対象とした月並句合のことである。それは、毎月定例の催しとして、あるいは社寺への奉燈・奉額などの名目を設けて発企人(催主)が宗匠の出題を乞い、締め切り日を定め、広く一般から投句を募集し、高句句には景品を与え入選句は小冊子に印刷して投句者へ返送するという形態をとった。いわば不特定多数の大衆を相手とする、定期的ないしは臨時的懸賞募集句である。投句料は、通例一句につき八文(そば代の半分)という安さで、誰でも手軽に応募できたし、奉額句合の入選句の入選者になれば、神社の掲額にその名と作品が記録された。因に一茶も江戸住まいの頃、江戸周辺で小規模な月並の選を試みたらしく、『一茶園月並』(文化12年発行)という刷物が現存する⁵⁾。

第三の特色として、寛政から文化にかけての田舎体の江戸俳壇流行を挙げなければならない。田舎体とは、都会風の俳諧に飽きた人々が地方色に新味を求めて試みた俗語調の句体であるが、それは『田舎芝居』(天明7年刊)に始まり、『道中膝栗毛』(享和2~文政5年刊)に至る文壇の田舎物の流行とも軌を一にしている。こうした風潮は、後述の一茶社中が形成されていく場合、ある意味でプラスの要素だったと言える。

以上のような特色以外にも、当時の俳壇さまざまな特色がある。それについて、文化14年に一茶自身の校舎によって刊行された『芭蕉葉ふね』(『一茶全集』別巻)という書物は、その一面を示している。その主な点を次に列記しておきたい。

①しだいに“芭蕉へ帰れ”という動きが活発化してき

たこと。

②俳壇における各俳諧流派が分立し、社中だけに留まる、いわば「井の中の蛙」的傾向が強まってきたこと。

③連句における付句がみだれてきたこと。

④当時「学びの花」といわれる「敷島の道」（国学のこと）が、俳壇でも流行していたこと。

⑤俳句番付が流行していたこと。

⑥俳論が多数販売されていたこと。

⑦句作の面でも、単に表面的に上品な言葉を安易に用いる傾向があったこと。（みせかけの風雅）

以上が概略的な当時の俳諧状況である。最後に、一茶が郷里柏原に定住する文化10年(1813)頃までの、信濃における俳諧の普及状況について多少触れておきたい。

信濃では、17世紀に入り急速に俳諧が普及していった。享保年間(1716-35)にかけて、まず善光寺の寺侍(門跡に仕える侍)や有力・商人僧侶らと京坂地方の文人との間に交流が開け、貞門や談林風の句作がしだいに行われるようになった。例えば、上田藩士加舎白雄(1737-91)の信濃への影響はそのひとつである。18世紀後半になると、社中が形成され始め、各町村の豪農(商)なども加わり、俳諧が広まっていった。そしてこの頃になると、かつては民衆には身分不相応とされていた遊芸が、誰にとっても「身分当り前」となっていく⁷⁾。さらに天明・寛政期(1781-1800)から文化・文政期(1804-29)にかけ、信濃の各地方に諸流派が起り、本格的に俳壇が結成されるようになった。一茶を中心とした社中もこうした流れの中で結成されたのである。

(b) 一茶社中形成の足跡について

では一茶社中は、どのような過程を経て成立していったのであろうか。これについて言及する前に、当時すでに本格的に俳諧の世界に名も知られてきたが、生活自体はなお苦しかったらしい一茶自身の、社中を結成し郷里に戻ろうとした心境変化の理由に触れておきたい。

それには大きく三つの理由が考えられる。第一には、文化元年より3年前の享和元年にただひとりの肉親である父親を亡くしたこと。第二に、江戸の俳壇、特に一茶と直接関係のある葛飾派とおりあいがよくなく、また当時の江戸俳壇に対して反発があったこと⁷⁾。第三に、江戸での友人たちが次々と他界したこと。こうしたことが彼を郷里に向かわせたと考えられる。

一茶は、父の死後遺産分配問題の和解が成立した文化10年(1813)に郷里柏原に定住した。だが、一茶は非常に計画的な人間であり、定住する数年前から社中結成の

準備を怠っていなかったのである。これに関する資料として、後に北信濃の門弟となる人々への一茶による書簡および日記がその事実を記している。次の年譜は、それらの資料を基にして一茶が郷里に定住する数年前の足どりの一部をまとめたものである。

年 月	事 項
文化4年7月 (一茶45歳)	亡父七回忌のために帰郷し、郷里に門弟を増やしていくためのいろいろな手を打つ。ことに毛野(長野県上水内郡三水村)の滝沢可候の家を根拠地にして、六川(上高井郡小布施町六川)や北部などへも手をのばす。
8月	波温泉で野尻の俳人湖光・関之と落ちあって歌仙を巻く。
11月	滝沢可候の世話で善光寺の富商滝沢家(可候の分家)に宿泊。高井郡西江部村(現中野市西江部)の真言宗建庵寺住持冬水に書簡を送る。
文化5年6月	草津温泉雲嶺庵(鷺白宅)に行く。
8月	野尻の湖光・関之と宇佐美定行の城山を見て住時をしる。
文化6年2月	建部東兆の面贖を長沼の松井松宇に送る。水郷里付近に一茶社中をつくる努力を怠らず。門弟との音信にも気をつけている。
文化7年5月	この頃、一茶はすでに信濃へ引くといふことを諸方へ話していた。
12月	長沼の魚淵より手紙と扇代が届く。(魚淵入門)
文化9年11月	柏原に入る。丘右衛門という人の家を借りて越年。門人可候が羽ぶとん、春甫が紙帳を送る。(『一茶翁馮記』)
文化10年1月	義弟仙六から亡父の遺産半分を取り上げることに成功。以後柏原を生活の根拠地とすることになった。以上『一茶全集6巻』p.p.323-422 抜粋

上の年譜からも分かるように、一茶は文化4年から7年にかけて毎年郷里に戻っていることが分かる。もちろん亡父の遺産を義弟から取りかえすのが主目的ではあったが、郷里に定住後の自分の生活的基盤となる社中をつくるということも重要な郷里帰還の目的であったわけである。文化9年の帰郷後は、一茶社中も定着してきて、6,7年後になると越後の門弟なども増加し、その社中の範囲が次第に拡大していった⁸⁾。

ところで、上の年譜に関連して興味深い記録がある。それは文化7年の魚淵の社中への入門の記録である。この記録から社中への入門状況の一端が窺える。俳諧社中の中には格式を重視したり、東條としての入門時における持参品なども厳しく決められていたところもあるようであるが、一茶社中に限って言えば、多少の入門料が「扇代」として求められたり、または盆暮れの仕え物程

度で、あまり厳肅な入門上の決まり（格式）はなかったようがある。この点については、今後さらに吟味してみたい。

(3) 北信濃を中心とした一茶門人の主な階層・職業とその特徴について

では、どのような人々が社中を形成していたのだろうか

か。門人の階層および職業を整理した上で、とりわけ化政期という時代における一茶社中の主な特徴を吟味してみたい。

下記の資料は、『一茶全集』を中心に、特に北信濃における一茶社中の門人の主な職業その他をまとめたものである。

一茶社中の人々の階層・職業および主な関連内容
——北信濃一帯を中心に——

地名	姓名	雅(俳)号	出身階層職業	備考
高山紫	久保田	春耕・成布 (夫妻)	大地主	水車をまわして、近在の精米を一手に引き受け、染料の藍をつくった。藩の許可を得て朝鮮人参の栽培をする。
毛野	滝沢善右衛門	可候	大地主	春耕と従兄弟の関係。毛野第一の豪農。
柏原	中村太三郎	二竹	酒造家/旅館 経営	父親の平湖は幼い一茶の面倒をみた。中村家は、毛野滝沢家・紫の久保田家と縁続き名家。
長沼	西島次郎次	士英	酒造家/書家	十哲の一人
長沼	佐藤信胤	魚淵	医師	十哲の一人。親子で一茶門人。医師で蘭学に通じ活花・茶道・絵画に通じた趣味人。また飯山藩御用の油屋でもある。寺子屋も開く。
長沼	立花	呂芳	僧侶	
長沼	中村順石	掬斗	医師	十哲の一人
長沼	吉村伴七	雲士	大地主	十哲の一人
長沼	住田奥右衛門	素鏡	大地主	十哲の一人
長沼		二休	僧侶	十哲の一人 正覚寺
長沼		月好	僧侶	十哲の一人 原立寺
長沼	村松処信	春甫 (一茶門人 第一号)	大地主/画家	十哲の一人。俳諧と南宋文人画に造詣が深い。今日残る一茶の肖像はほとんど彼が描いたもの。中年以後家塾を開いて山村子弟の教育にも尽くしている。元は夏目成美門下。
長沼	松井善右衛門	松宇	大地主/問屋	三木亭
石村	峰村仙蔵	白斎	大地主	十哲の一人 正見院
六川村	寺島善蔵	夏蕉・白也 (父子)	大庄屋	五千石 白也は後代官を勤めた。晩年一茶に最も傾倒した一人である。
六川村		知洞	僧侶	梅松寺
六川村	玉木恒右衛門	基壁	代官	六川陣屋の代官
六川村		大綾	椎谷藩士	柏原大火のとき生活の面倒をみてくれた。
六川村	関谷	吐風	豪農	
中野	山岸清左衛門	梅堂・梅壘 (父子)	醸造業/医師	草津峠を越えて、江戸とも取り引きのあった豪商。父子ともに医師を兼ねていた。和漢の学にも通じ、私塾も営んで子弟を教育。

中野	白井	一之	酒造家	屋号は「伊勢屋」山岸家とは親戚関係にある。彼を中心として『おらが春』出版。
横倉村	坂口喜左衛門	楚江	大地主／酒造家	村のため私財を投じて用水堀を開いた名望家。一茶晩年の門人
横倉村	中島通庵	雲里	大地主／医師	
湯田中	湯本五郎治	希杖・希翠 (父子)	旅館経営	江戸中期から旅館を経営。如意湯。一茶の最も信頼した門人の一人。
浅野	西原佐右衛門	文虎・粟之 (父子)	油商屋	飯山藩御用の油屋。父粟之とともに一茶門人。文虎は『一茶翁終焉記』の執筆者。
高井野村	中村弥曾八	鼻鳥	番頭	彼は久保田春耕家の番頭である。
古間	木田	白飛	富商	木田氏は鎌の間屋で鍛冶ではない。代々問屋業を営み、古間鎌でさらに飛躍し宿一番の富商となる。
高井野村	梨本七郎左衛門	牧人	酒造家	
古間	小林庄吉郎	雲居	酒造業	寛政後期からの一茶門人。
牟礼	小川	卜英	呉服商	近隣に聞こえた呉服商。長沼の吉村雲士宅とは親戚関係。
牟礼	荒川三郎治	草水	名主 寺子屋師匠	一茶晩年の門人。
牟礼	小山	有隣	医師	
三水村	草間	由水	大地主	
三水村	原	一溪	大地主	
野尻	石田津右衛門	湖光	旅籠屋	
野尻		魯堂		
野尻		迅碩	医師	一茶の主治医。
野尻	岩尾	露しう	僧侶	真光寺
野尻	池田十郎兵衛	関之	宿の旧家	一茶とは肝胆相照らす仲。
善光寺	上原権右衛門	文路・春尾 (夫妻)	葉問屋	屋号「三好屋」一茶に対して物質的援助をかなりしていた。
善光寺	小林久七	反古	問屋富商	元は夏目成美門下 屋号「美濃屋」。
善光寺	岩下	草司・呂調 (父子)	茶商	
善光寺	今井	柳荘	藩士	彼の子今井磯衛門は善光寺大勧進大官。
善光寺		柯尺	菓子商	三水村(毛野)滝沢可候の分家。
上田			僧侶	向源寺
妙高	後藤多兵衛	甫外	大地主／旅宿 経営	
関川	峰村長左衛門	花船	油屋／関川宿 本陣	

〈その他〉 俳号のみ

斗圃 柏葉 子来 有好 杉谷 雪丸 稻伽 允兆 相我(岩淵) 春和(田代) 看齋(丸山) 系審 笹人 程我
五柳 厭路 有美 菅根 三千可 舞涼 文来 亀石 相月 公常 白兔 余文 麦之

〈主な職業〉

武士(代官・藩士) 大地主 富商 酒造家 医師 僧侶 画家 旅館経営者 寺子屋師匠 番頭 葉問屋 油屋 など

9)

上の表には、一茶の門人80数名の名前が列記されているが、職業その他のことの判明しているものは60名程度である。残り20数名は番号のみ文献上見られるだけで、詳しいことは分からない。したがって、職業などの分かる60名程度の門人を中心に、一茶社中に見られる階層融合の特徴を吟味していきたい。

まず第一の特徴としては、北信濃一帯に門弟が分布しているということである。特に長沼・六川村・高井野村などには数多くの門弟がいたことが分かる。だが当時北信濃で最も俳諧の盛んであった善光寺町には、比較的一茶社中の人間が少なかった。これは、別な宗匠を中心とした社中がすでに勢力を持っていたからである¹⁰⁾。したがって一茶社中は、善光寺周辺に主に形成されていったのである。なお一茶への何らかの反発からかもしれないが、彼の郷里柏原には門弟が少なかった。

第二の特徴としては、一茶社中はさまざまな職業の人々によって形成されていたということである。主な職業としては、農業(大地主が多い)。武士(代官・藩士など)・豪商(酒造家・油屋・茶商・菓子商・呉服商など)・僧侶・医師・葉問屋・旅館経営者・画家・書家・寺子屋師匠・番頭などがみられる。しかもこれらの職業に従事した人々の多くは、ほとんどが素封家であった。

第三の特徴としては、一茶社中の場合、上記の職業の中でもとりわけ上層農民の占める割合が大きいということである。因に、番号のみの人々のほとんどが、上層農民であったといわれている。そして、こうした人々は農業だけでなく商業にも従事し、たいてい職業を複数持っていたことが分かる。

第四の特徴としては、親子・親戚・夫婦などで一茶社中に加わっていることである。例えば、親子で一茶社中に参加しているものには、六川村の夏蕉・白也父子、中野の醸造業兼医師であった梅堂・梅壺家、湯田中で旅館を経営する希杖・希翠父子、善光寺の茶商兼本屋を営む草司・呂調父子などがいる。また親戚関係としては、柏原の酒造家兼旅館経営の中村二竹と毛野滝沢家および紫の久保田家の場合や、中野の山岸家と同じ中野の白井家の場合などが考えられる。さらに夫婦としては、久保田春耕・成布および上原文路・春尾の場合などがそれである。なお特殊なケースとしては主人と番頭といった関係

もあった。しかもこうした人々は、一茶社中の中でも特に有力な一茶門弟であり、しかも縁故関係での社中への入会紹介などは、一茶社中拡大の一要因にもなったと考えられる。

第五の特徴としては、これらのさまざまな職業を営む人々は、単に歌仙を巻く座のみのつきあいとしてではなく、ある意味で一つ、いわば「生活共同体」として運営されていたということである。この点に関して、一茶を中心に考えてみるとその一端が窺える。例えば、一茶の門人には医師が多いが、こうした人々に自分の病気についての相談や、妻の妊娠状況の診断、時には葉について書簡で質問していることや、一茶の住まいがある柏原が大火になった時、六川村の椎谷藩士大綾が面倒を見てくれたことなどはその良い例である。

以上のような一茶社中の五つの特徴以外にも、例えば善光寺で葉問屋を営み、一茶に対してかなりの物質的援助をしていた上原文路の妻春尾や久保田春耕の妻成布の例にみる、当時の女性の教養と俳諧への参加の問題など、今回は取り上げられないが興味深い問題の一つである。

これまで、一茶社中形成の足跡および北信濃を中心とした一茶の門人たちの主な職業とその特徴などについて吟味してきたわけである。では、こうした一茶社中の俳諧活動の実態に基づきながら、そこにどのような教育史的意味を見いだせるであろうか。特に、人間が生きていく場合の「教養の共有化」および「学習機会」に焦点をあてながら吟味していきたいと思う。

2. 一茶社中の俳諧活動の教育史的意味について

まずここでは「教育」を、善く生きようとする人間の向上的関心と意欲に対して、善くしようとする働きであると捉え、それとの関連をみようとするものである¹¹⁾。こうしたことから、前述のような特徴をもつ一茶社中の俳諧活動の教育史的意味を考慮した場合、大きく次の三つの点が挙げられる。

- ①本来「座」(集会の席)とは、共通した世界観・人生観・学習観および自然に対する態度等に基づいて善く生きようとする、いわば人々の向上的関心と意欲に支えられて自然に発生した集団であり、一茶

社中も例外ではない。宗匠と門弟との関係もこうしたものの考え方を土台にしながらかつ形成されている。では、それらは一茶社中の場合はどうであったろうか。

②一茶社中の内部で、一茶を中心としながら、連衆間で具体的にどのような学習交流が展開されていたのか。これについて、下記の三つの点に注目しながら検討したい。

- (a) 歌仙による句作活動—創造的学習に基づく直接的対話—
- (b) 書簡による俳句評価—通信による間接的対話—
- (c) 書物の貸借状況にみる学習交流の実態

③宗匠一茶にみる当時の俳諧師の教育的役割について、特に「伝達」的役割と「創造」的役割とに注目しながら吟味したい。

(1) 一茶社中における思想的基盤—世界観・人生観・学習観を中心に—

まず、一茶社中にみられる世界観・人生観から考えてみたい。

文学上一般に、一茶の個性とその作品の独創性を一文字で象徴すると「生」であるといわれる¹²⁾。一茶の場合はそのとりわけ、「生」といっても、山川草木・鳥獣魚類、さらに自然現象や無生物でさえも、友であり、仲間であり、兄弟であるような、いわば「共生」的世界観とも呼ぶべきようなものが展開されている。さらに彼の人生観は、特に晩年においては、決して邂逅などに代表される人生に対する消極的志向ではなく、むしろ「生」の現実社会へ積極的に入り込んで行こうとする、人生に対する積極的志向を示している。一茶には、赤裸々な自分というもの、あるがままの自分というものを、この現実の中で自然に従いながら展開していこうという姿勢が窺える。例えば、帰郷に定住する前の年に著した『株番』という書物の中で、「よしよし汝はなんじをせよ。われはもとの株番」と自ら宣言し、その後本格的に、いわゆる「一茶調」を形成していくところにもその一端が感じられる。このような宗匠一茶の世界観・人生観が、自ずと社中の中にも浸透し反映されていたと考えられる。その一つの証拠として、文政12年に、一茶の死後門弟によって出版された句集『一茶翁句集』がある。その最後の部分に門弟の一人(文虎)が書き記した師一茶についての次のような文章がある。

「月を覆う雲、花を散らす風、善悪表裏はめぐる車の如しと、いにしへの人のことばこそむべ(もっともなこ

と)なれ。我師は能くこれを曉し、生涯を自然に任せられしに、いぬる文政丁亥の冬身まかられてのち、教へを請し、人々速き境までも最奇々々にいひ伝へ…¹³⁾」(傍点引用者)

この文章からも、宗匠一茶の「教へ」が、いかに門弟間に浸透していたかが推察されるのである。

次に学習観についてである。一茶の学習観も、多かれ少なかれ門弟たちに反映していたと考えられる。では一体、宗匠一茶の句作における学習観とはどのようなものであったろうか。これについては、次の門弟の一人季園あての書簡および長沼の門弟魚淵が文化12年に一茶の援助を得て編纂した『あと祭』の最後の部分の中に、その一端を見ることができる。

「かかる句作、芭蕉一派の権(はから)ひ也。法に縛られずして法にかなへ。しかし平生のけいこにはいく度も恋の詞を入れてうけ玉(給)ふべし。好みにいたすはあしき也。恋の詞なくして、むりに恋をこもらせんとすれば、明和のころ、蓼太・素丸の達人五人、党をむすびて『五色墨』といふ一派を五歌仙出版して、大に行れしが、今はとらず。其中に『袖引ば茜揃るにとふり切てかの人の名も知て居る也』是、かの人にいふて恋をもたせられた、俗中のしゃれなれば豊後の紋(文)句をよむやうにていやしく、さるにより、一時起りて一時にすたれたり。努力(ゆめゆめ)か様な事玉(給)ふな¹⁴⁾。」

「すべての人の心、おもてのごとく同じからざれば、人のあたまの蠅の世話やかむよりは、汝はなんちの蛸をせよ。我はわが木樞¹⁵⁾」

始めの例は、一茶が上田の門弟季園に対して、特に恋の句作成について助言したものであり、後の例は前に掲げた一茶の『株番』の内容を門弟魚淵が参考にして書いたものである。この中で一茶は、芭蕉の考えを句作の基本としながらも、次のような学習方針を提唱していることが分かる。一つは、句作における反復練習(学習)の奨励であり、もう一つは学習における模倣過多への警告および独創性重視の学習観である。こうした一茶の学習観は、上記の二つの例からも分かるように門弟たちに反映されたと考えられる。

最後に一茶の自然に対する態度が、自ずと同郷の門弟たちに受け入れられていた点について述べておきたい。一茶は、特に晩年になって単なる型通りの花鳥風月を詠んだのではない。例えば彼の雪の句に「はつ雪を皆ふんづけし鳥哉」「日の暮のいやな小雪の降出して」「しなのちや意地にかかって雪の降」等がある。これらの句は決して花鳥風月的なものではない。こうした一茶の雪の捉

え方は、門弟のそれに対する見方に反映している。その一つの例として、一茶と門弟文虎との歌仙における次のような付合—「大雪のどたばとふたる市祭」(文虎)「そりやござったぞ代官の籠」(一茶)(文化13年)—などは、そうしたことをよくあらわしていると思われる。

以上、一茶社中の思想的基盤を、世界観・人生観・学習観を中心に概略的に検討してきたわけである。前述したように本来「座」は、上のような思想に支えられながら、善く生きようとする人々の向上的関心と意欲によって自然に発生した集団である。したがって、一茶社中における歌仙の句作活動の具体的内容および実態を吟味するにあたっては、こうした人々の根本的なもの見方および考え方を抜きにしては考えられないと言える。こうした点をふまえて、次に連衆間の学習交流の実態を検討することにした。

(2) 連衆間の学習交流について

(a) 歌仙による句作活動—創造的学習に基づく直接的対話—

いわゆる「歌仙」とは、連歌連句の形式で、長句と短句を交互に36句連ねたもの(興行)で、座の文芸といわれ、気心の分かった仲間(連衆)が集まり、共同で一つの作品を作成する創作活動であり、かつ文芸的な「対話」である¹⁶⁾。こうした「対話」の中に自ずとさまざまな学習が展開されるわけである。なお、歌仙のおもしろさは、主として一座の興趣にあるがそれがすべてではない。巻き上がった一巻を推敲し、添削し、それを一個の文学作品として享受、鑑賞する楽しさもある。こうしたことを踏まえて、では一茶社中の歌仙の特色はどのようなところにあり、それを通してどのような学習交流が行われていたのかを考えてみたい。

まず一茶社中の歌仙の第一の特色は、吟調が自在であり、郷土色も豊かな付合(つけあい)が随所に見られるということである。吟調の自在さについては、一般に初折の表六句は「序」と呼ばれ¹⁷⁾、なだらかに穏やかな調子で行われるわけであるが、一茶社中の場合は、かなり最初から自由奔放に付合がなされていたのに気づく。また郷土色の豊かな付合については、社中の場合農村の四季を詠んだものや方言を多用しているといった特色がみられる。第二には、土俗的な庶民生活をエネルギーに活写しているという点である。つまり庶民と一体になって、泣いたり笑ったりわめいたりするその猥雑さの中に俳諧を底辺からひき上げていく庶民のしたたかな活力が感じられるのである¹⁸⁾。一茶社中の歌仙は、生活に関するものを詠んだ句が多く、動植物にしる、子どもや酒

を詠んだものにしる、決して生活から遊離した対象としてではなく、生活の一部をなすものとして句に取り入れているという特色がある。

<例 1 「小男鹿の」(文政元年)>

小男鹿啼ほど啼てうつばしる	春甫
冷々風の蕎麦の葉の月	柏葉
木綿買大ものさしを突きして	一茶
まんまどこえしり合の船	春甫
そそくさと茶漬の膳をあつらへる	柏葉
しだれ柳の仰に涼しき	一茶

<例 2 「有合の」(文政4年)>

拙者儀も今年たばこの一と煙り	一茶
とかく四五人よればかまける	同
米の値のピンとはねたる船便り	一巴
妙に気転のきいた御亭主	同
炭俵つみ置く年の花日和	一茶
あぐらの膝に蝶の寝て行く	同

(『一茶全集第5巻』¹⁹⁾)

ここに例示した付合の一部からも、人生・自然・社会といったさまざまな点について対話していることが分かる。

ところで、歌仙創作は大きく二つの面を有している。それは、「個」としての面と「衆」としての面である。「個」の観点からみれば、連衆一人一人が持っている、詩題に基づく個性を尊重しながら作品を形成していかなければならないわけであり、「衆」の観点からは、全体としての歌仙の調和が要求されてくる。こうした「個」と「衆」との相互的なバランスをとるのは、宗匠の役目であるといつてよい。これを一茶社中にあてはめてみた場合、宗匠一茶を中心として「個」を最大限に尊重し、師弟という関係よりも「友」としての相互的なバランスを取ろうとしていたと理解される。それに関して、右の門弟春甫によって描かれた長沼の門弟を中心とした「俳諧寺十哲像」の絵は、そうした面をよく表している。師弟が円座しており、十哲の中に一茶自身が加わっているところなどは、一茶社中らしいと思われる²⁰⁾。

こうした中で、句作のための連衆間における学習交流が展開され、その主な学習としては、①俳諧における付合の技術を学ぶこと、②付合を通して自然や社会等を広く認識し学ぶこと、③連衆間の対話を通して各自の職業的知識を学ぶといった点が挙げられる。

(b) 書簡による俳句評価—通信による間接的対話—

芭蕉忌は、翁の日だけいひ過ぎたらん。

粟津から来たのか今の一しぐれ

など、一直づつ仕候。御意如何あらん。是等みなみな甘心、小福帳にとめ申候。」(一茶→斗間)

③「○白露、我家の方、戸明れば、本葉、上々吉 ○さて透遠るは御寺哉などとあらばいかならん。」(一茶→文路)²¹⁾

これらの例は、すべて一茶が門弟に添削指導および評価して出した書簡の一部である。添削方法はいくつかあるが、ここでは「一直」として手を加えていることが分かる。また評価も「甘心」「上々吉」といった言葉を用いて行っている。その他書簡で目につくのは、書簡の最後に必ずといってよいほど「御評価可被下候。」「貴評価被下。」などの言葉が見られることである。これらは、俳諧をたしなむ人々の書簡における慣例的交句であると一般には考えられているようだが、単にそれだけではなく、相互の俳句による学習交流の活性化をはかる要素をも含んでいると考えられるのである。

以上、書簡による学習交流を概略的に見てきたわけであるが、これはほんの一例に過ぎない。おそらく実際には通信の発達にともない、こうした書簡を通しての、いわば間接的対話とも呼ぶべき学習の交流がかなり活発になされていたと思われる。

(c) 書物の貸借による学習交流

連衆間の学習交流の具体的事実として、最後に一茶の日記にみられる門弟・俳友との書物の貸借の実態を通しての学習交流について考えてみたい。ここでは特に『一茶全集第3巻七番日記』中にみられる関連内容の一部を次に紹介してみたい。

年 月	事 項
文化10年1月	アサノニ人(旧間屋の西原文虎宅)『土佐日記』借ス
3月	湖光ニ『秋暮集』渡ス ケノニ入『方丈記』『芭蕉句選』可候ニ借ス
12月	野尻ニハ入『竹取』ト『四十二法』関之ニ借
文化13年8月	文路トキヤ外ニ入来ル『千里帖』『魁帖』文路ニカス
文政5年9月	希杖ニ『犬筑波』借ス 10月 ト 英ニ『おらが世』借ス ²²⁾

これらからも分かるように、一茶と門弟との間で、書物の貸借による学習交流が行われていたと考えられる。またこうした事実は、連衆たちの活発な学習意欲があったからであることを見落としてはならない。その他にも



一茶の書簡は、現在 110 通程度ある。一茶は筆まめで、非常に多くの書簡を書いたことが日記等で知られるが、現存するものは写しを含めてもあまり多くない。だが、現存する一茶書簡の中には、連衆間の学習交流の状況に関する事実が非常に多く見られるのである。その二三の例を次に紹介したい。

- ①「玉吟いづれもおもしろく、その中にめくじり立る花○なの花○放亀等、別して甘心仕候。」(一茶→春甫)
- ②「御句、おのずからの ○朝風やかのご雪(雲)○目に見ゆる秋は、ちと一句落着せずやありけん。目に見ゆる秋とはなりぬはたて雲と一直(宗匠が悪いところを直すこと)いかがあらん。早風雲がよからんか。神の風はあまりくはしくやあらん。ともし火や估の風のおりに

日記には、例えば「関之トナヘノ滝見」(文化10)、「善光寺ピシャ門堂書画会」(文化13)などといった記録も見られ、多様な交流があったことが窺われる。

以上連衆間の学習交流を、(a) 歌仙による句作活動、(b) 書簡による俳句評価、(c) 書物の貸借にみる学習交流、これら三つの点を中心に吟味してきた。こうした吟味から分かることは、化政期という時代的制約および地方農村である北信濃という地理的制約の中で身分を越え、一人の人間として、俳諧という共通した課題に基づいて、活発にしかもかなり自由に、多様な手段によって学習が行われているという事実である。こうした事実から、私は、本来人間に備わっていると思われる向上的な学習意欲に支えられた、いわば教育に対する民衆の生き生きとした力強さを感じるのである。

(3) 宗匠一茶にみる俳諧師の教育的役割について

一茶社中の俳諧活動の教育史的意味についての第三の問題として、俳諧宗匠としての一茶が、どのような教育的役割をもっていたのかを吟味したい。このことは、ひいては一般に俳諧宗匠の教育的役割の理解にもつながる。

宗匠一茶にみられる教育的役割として二つのことを指摘することができる。一つは、前述したような人間の直接的・間接的対話に基づくところの歌仙および書簡における添削指導であり、もう一つは、社会の情勢・出来事・流行などを社中の人々に伝達するといったことである。つまり、一茶を通して見た俳諧宗匠の教育的役割に、前者のような「創造」的役割と、後者のような「伝達」的役割との両方の要素が含まれていることが理解されるのである。こうした二つの側面について、具体的事例を示しながら次に検討してみたい。

(a) 添削指導による「創造」的役割

俳諧宗匠の添削指導とは、大きく分けて歌仙におけるものと書簡によるものがある。(前述)特にここでは、歌仙における宗匠の役割を検討してみたいと思う。

一般に、座における宗匠の役割は、歌仙の付合時における変化や歌仙全体の調和・軽重によって展開のおもしろさを生み出していくことにある。句の可否、付けの適否は宗匠が捌き、一卷が終了すれば直ちにその場で披露されることになる²⁹⁾。したがって、いわば指導者としての俳諧宗匠は、連衆の中でどのような前句(付句をするとき句を付けるべき前の句を言う)に対しても、対応できるためのあらゆる領域の知識を事前に備えていなければならない。つまり、その場で知らないではすまされないわけである。したがって一茶の場合も、易・

学・歴史・古典・地理などのさまざまな知識を自ら習得していたのである。これは、彼の資料に見られる勉強ぶりからも明らかである²⁹⁾。

また、歌仙を巻く場合、そこに集まった人々の人間関係によって添削の仕方とも異なることも認識しておかなければならない。つまり、仮に対等の力量の場合には、自分の句に手を加える程度で、ほとんど後は添削できないが、一茶社中のように、一茶を中心としてそこに門弟が参加して巻かれる歌仙のような場合は、かなり宗匠が自由に添削することができたというように、連衆間のいわば力関係で添削方法が変わったのである。したがって、現存する一茶晩年の郷里で門弟たちと巻いた歌仙などをみると、確かに一茶自身が捌きをし、添削していたという事実が資料によって窺える。下の例は、とりわけ一茶社中の強力な支持者が多かった長沼連衆と宗匠一茶が巻いた初折の表六句と裏十二句の部分である。

〈「小男鹿や」(歌仙) 文政元年〉 (一部前出)²⁵⁾

小男鹿や啼ほど啼てうつばしる	春甫
冷々風の蕎麦の葉の月	柏葉
木綿買大ものさしを突きさて	一茶
まんまとこえしのり合の船	春甫
そそくさと茶漬の臍をあつらへる	柏葉
しだれ柳の仰に涼しき	一茶
つひそこに伊豆の大鳥見ゆるなり	春甫
八文酒にいそぐ御飛脚	柏葉
日の暮にいやな小雪の降出して	一茶
亥の子の餅を犬もいただく	春甫
奥女中其下々も打粧ひ	柏葉
うはの空にて鰯口たたく	一茶
月かげにおとく狐のをどる見ゆ	春甫
けろりおこりの落る秋風	柏葉
啼虫の入間那へいざさらば	一茶
貧乏鬨にあたる小無尽	春甫
顔の皴のばし葉の花咲て	柏葉
さあへかすめへむだ山	一茶
うぐひすに御供の衆もひと	春甫
火の用心の鐘がなるなり	一茶

上記の歌仙は、文政元年9月(一茶56歳)長沼の春甫亭で一茶の捌きによって同地の門弟たちが行ったものの一節である。これらの付合の中に、宗匠としての一茶らしい捌きが随所に見られる。例えば、「つひそこに」や「八文酒」などの表現や、初裏十一句目の花の定座としての顔の「皴のばし葉の花咲て」の句の人間臭い花の句を自ら加えるところなどは、一茶らしい捌きだと言え

る²⁶⁾。

こうしたものの他にも、句作における創造的援助として、門弟が刊行物を出版する場合の後見としての宗匠としての役割もあった。事実一茶の場合も、『蕈艸』『木樨集』など幾人かの門弟の刊行物に力を貸している。

(b) 行脚による情報の「伝達」的役割

一茶は郷里に定住後、始終門弟の家を回っていた。一茶は一年の半分以上は門弟の家を泊り歩いていた²⁷⁾。こうした行脚の目的は、単に歌仙を巻いて指導することだけでなく、もうひとつ重要な目的があったのである。それは、さまざまな知識および情報を人々に知らせることである。例えば、中央の江戸における状況および出来事・事件等の情報を、なかなか土地を離れることのできない人々に知らせたり、あるいはまた中央における俳諧状況を知らせたりすることなどがそれである。

したがって、一茶の日記などを見ると、社会のさまざまな出来事をこと細かにメモしている。こうした点について、一般には彼の筆まめな性格のためと考えられがちであるが、決してそのような単純なものではなく、それは俳諧師としての職業生活上、欠くことのできない条件であったのである。これに関して、次に一つ例を挙げてみたい。

一茶は、文政8年3月に信州中野の連衆と歌仙を巻いている。その発句で一茶は、「世が直るなをとでかい蜚かな」と詠み、それに対して連衆のひとり一巴が脇句で「下手のはなしの夜はずしい」と付けている。事実一茶は、『七番日記』の文化10年10月13日に善光寺の門前町で起こった打ちこわしについて、「於善光寺夜盗三百人計蜂起シテ確富民二十三家²⁸⁾」と記している。こうした情報なども、社中内の富農・富商の門弟などに伝えていたのであり、また人々もそうした情報をできるだけ具体的に聞きたいと思っていたにちがいない。なお、直接会って伝達できない場合などは、書簡によって知らせていた事実も資料に残されている。

む す び

以上、本稿では、まず一茶社中が活動した時代の特徴を、当時の階層融合傾向の活発化と俳諧の動向を中心に、その一般史的事実を検討し、それに基づいて一茶社中の俳諧活動の教育史的意味を吟味してきたわけである。

これによって考えられることは、身分制社会の身分に応じた学習機関ではなく、その枠外で人々が、俳諧という同一の教養の共有化を目指しながら、自主的に結成さ

れたいわば一種のサークルとしての「座」のあり方に、階層の融合した開かれた学習機会が成立し始めており、それが近代の四民平等の学習機会というあり方への一つの伏線的作用を果たしたということである。ここに一つの教育史的意味があると考えられる。

註

- 1) 坂本太郎『日本史』, 山川出版社, 1958, p.p.356-359
- 2) 伝田 功『豪農』, 教育社, 1978, p.21
- 3) 塚田正朋『長野県の歴史』, 山川出版社, 1974, p.p.195-206
- 4) 杉浦明平『化政・天保の文人』, 日本放送出版協会, 1977, p.14
- 5) 高橋 敏『民衆と豪農』, 未来社, 1986, p.15
- 6) 信濃教育会編『一茶全集』第7巻, 信濃毎日新聞社, 1977, p.p.361-370
- 7) 長野県教育史刊行会『長野県教育史』第1巻, 1979, p.p.200-204
- 8) 『一茶全集』別巻の年譜に、文政2(1819)年3月14日江戸の俳友青野太筈江戸俳壇の腐敗をのしる書簡を送っているという事実もある。
- 9) 前掲『一茶全集』第6巻, p.p.379-380
- 10) 前掲『一茶全集』第6巻～別巻参照
- 11) 小林計一郎『俳人一茶』, 角川書店(文庫), 1964, p.p.180-184
- 12) 村井 実『教育学入門(上)』, 講談社(学術文庫), 1976, p.p.71-86
- 13) 尾沢嘉雄『一茶研究史』, 至文堂(『国文学解釈と鑑賞—一茶』), 1956, p.48
- 14) 前掲『一茶全集』別巻, p.239
- 15) 前掲『一茶全集』第6巻, p.p.378-379
- 16) 同前, p.284
- 17) 大林和平「連句概説」, 国書刊行会(『連句研究』), p.p.7-15
- 18) 歌仙の構造…①初折の表六句②初折の裏十二句③名残の表十二句④名残の裏六句
- 19) 丸山一彦「一茶の時代」, 筑摩書房(『俳句の本Ⅲ俳諧と俳句』), 1980, p.p.215-216
- 20) 前掲『一茶全集』第5巻, p.p.401-402
- 21) 鈴木勝忠・宮脇昌三『俳人の書画美術6 一茶』, 集英社, 1978
- 22) 前掲『一茶全集』第6巻, ①p.341 ②p.388 ③p.397
- 23) 前掲『一茶全集』第3巻参照
- 24) 東明雅他編『連句辞典』, 東京堂出版, 1986, p.8-9
- 25) 前掲『一茶全集』第7巻, p.p.387-476
- 26) 前掲『一茶全集』第5巻, p.p.401-402
- 27) 丸山一彦『蕪村集・一茶集完訳日本の古典58』, 小学館, 1983, p.p.329-339
- 28) 前掲『俳人一茶』, p.p.180-181
- 29) 前掲『一茶全集』第3巻, p.265